文芸

❖俳句

下駄の音久しく聴くや冬はじめ　池田　逸子

無病とは言えぬ齢や衣被　伊藤　敬子

鍋焼の汁に飯足す受験生　今関満喜子

金色に冬芽輝く夜明けかな　魚地　照子

穭田に二度の命の穂揺れかな　江森　悦子

腰痛をだましこらえつ年詰まる　大谷　武彦

バイキング風土里の味や冬に入る　川島　孝夫

鍋焼の幸福誘う夕餉かな　桑名　大行

冬ざれや地蔵の影の暮れにけり　向後　寛

小春日は老ひの仕事はかどりぬ　越川　義則

すくも塚膨よか藷に舌鼓　小松　藤男

野良犬の人恋しさや夕紅葉　佐瀬　輝夫

小春日や正座崩せぬ寺の庭　椎名万里子

蔦もみじツリーのごとく樹を飾り　宍倉　道子

小春日やロをすぼめて飴一つ　鈴木とし子

遠く行く雲に声かけ日向ぼこ　玉虫　栗扇

山の端に二つ星出て冬ぬくし　土屋　義昭

湯豆腐のぐつぐつ煮立つ加減かな　戸村　静華

輝きて夕日の当たる柿一つ　長谷川正子

湯豆腐や五勺の酒に無我の境　山口　一秋

沢庵漬ける母の遺愛の石のせて　山口　とし

上総から下総の国小夜時雨　渡部　和秋

❖短歌

秋晴れの渓谷をいま風に乗り
紅葉ひとひら散りてゆくなり　八角　三枝

捻挫して道に佇みゐし吾を
友は家まで背負ひくれたり　池田　春江

おしなべて紅葉深き山あいに
ひときわ燃ゆるいたや楓は　佐瀬　初音

図書館を囲む並木のマロニエは
今黄葉の季をむかへつ　西山満里子

トラックの走り行きたる風に乗り
公孫樹落葉のしばし舞ひたつ　吉岡　信子

二歳なる幼を膝に抱きよせ
舌切り雀を語りてやりぬ　押尾　輝子

山の端に沈む夕日の茜色
暫しみとれて立ち尽しゐつ　平山　芳子

教会の創立記念のプラタナス
五十年経て空に向かへり　田崎　尚美

走りゆく車の音に雀らは
木の葉の間より一斉に飛ぶ　芹川　初子

うっすらと境内染めし初雪を
踏みつつ本堂へ急ぎゆくなり　鈴木まさ子

炊きあげし松茸御飯の湯気たつを
まづは夫の遺影に供ふ　斉藤つね子

人の難余所目に通る今の世に
給ふ温情吾は救はる　伊藤　定男

小春日に意気込みばかり通りすぎ
一日手つかずはや暮れにけり　高梨　キヨ

今日もまた事件のニュースか
小春日の脊なに温もり受くる幸い　土屋　好

こうほう博物館 vol.10

芝崎の十九夜塔

国道の芝崎交差点から吉田へ向かう県道から一筋東へ入った田んぼ道の脇に、石に彫られた如意輪観音像が立っています。如意輪観音は座して右足を立膝にし、その上に右腕を載せて頬杖を突いた容像をした観音様で、面相が女性を表しているように見えます。

芝崎の如意輪観音は高さ1mほどの石に浮き彫りされ、その向かって右側上に「十九夜女人中」と彫られているところから、十九夜塔と呼ばれる石塔であることがわかります。左側には造立年「天保九（1838）戊年二月吉日」と彫られ、江戸時代後期のものですが、この塔は簡単な屋根が付けられているためか、風化が少なくきれいな像を保っています。十九夜塔は十九夜講という地区の女性が集まって行う集会を記念して立てたもので、多くはこの芝崎のように、水辺に立てられています。これはまた生活の厳しかった江戸時代、育たなかった子(水子)を供養するため、水の流れるところに立てたとも言われています。町内を歩いていると、ちょっとした水の流れのある水路の脇とか、道と小川が交差するところに、この十九夜塔を多く見ることができます。十九夜塔の如意輪観音の憂いを秘めた面持ちを見つめると、この世に生を受けることがかなわなかった児を思う母親の気持ちが想像されます。そのような野辺の石仏にどうぞ巡り会ってはいかがでしょうか。

▶芝崎の十九夜塔